

第4回 熊野川懇談会

参考資料 2

議 事 骨 子 集

第3回 熊野川懇談会	1
第1回 検討会	2
「熊野川(天の川)を語る会」(五條市大塔町開催)	3
「十津川(熊野川)を語る会」(十津川村開催)	5
「北山川を語る会」(下北山村開催)	7
「熊野川を語る会」(新宮市熊野川町開催)	9
「熊野川を語る会」(新宮市開催)	11
「熊野川を語る会」(紀宝町開催)	13

第3回 熊野川懇談会 議事骨子

開催日時 平成17年8月1日(月)14:00~16:30
開催場所 鵜殿村生涯学習センター まなびの郷
出席者: 委員 12人(4名欠席)、河川管理者等7人、傍聴者 44人

第3回熊野川懇談会を開催し、これまでの経過報告の後、委員補充について、現地視察会のまとめ、熊野川懇談会の今後の進め方について審議を行った。第3回の議事骨子は以下のようである。

1. 経過報告

- ・熊野川懇談会における設立後の審議・活動内容および第3回懇談会の広報内容について報告が行なわれた。

2. 委員補充について

- ・竹中委員(広報分野)の辞任を承認し、欠員を補充する。
- ・補充委員候補は推薦によるものとし(非公開)運営会議委員と元設立準備会委員が候補者の選考にあたる。
- ・懇談会委員による候補者の内諾を得て、河川管理者に欠員補充を要請する。

3. 現地視察会のまとめ

- ・現地視察会のまとめとして、視察箇所の各管理者(紀南河川国道事務所、紀の川ダム統合管理事務所、三重県、和歌山県、関西電力㈱、電源開発㈱)より現状および河川整備上留意すべき事項について説明を受け、その内容について質疑応答を行った。

4. 熊野川懇談会の進め方について

- ・「熊野川を語る会の運営と内容」「河川整備に係わる課題」等について自由に議論できる場を設ける。
- ・検討会は次の懇談会の前に時間をかけて、忌憚なく協議ができるよう非公開で開催する。
- ・委員、有識者からの情報提供は、懇談会の状況に合わせ適宜行う。
- ・地元の住民が何を望んでいるのかを知る必要がある。意見を聞いて課題をまとめる段階でワーキングを立ち上げればよい。
- ・地元の意見を聴き、課題をまとめる方法の一つとしてKJ法というものがあり、これを用いて課題を集約することが出来る。(KJ法:様々な意見を集約するための使われる技法)
- ・委員の中には専門家の方が多くおられるので、それぞれの専門分野について懇談会で披露する機会を作りたい。
- ・熊野川を生活の場として生きてこられた方の生活や知恵、工夫について話が聞きたい。
- ・熊野川を中心とした観光の課題について話を聞きたい。
- ・懇談会委員が議論したことを河川管理者はどこまで受け入れてくれるのか。
- ・データの請求については課題毎に集約する。

5. その他

(傍聴者からの主な意見)

- ・昔に比べれば熊野川の水は濁っている。濁水について考えてほしい。(新宮市)
- ・現在も行われている砂利採取が将来どのような影響を与えるか、今後も幅広い議論をお願いしたい。(新宮市)
- ・日足地区の洪水対策を考えてほしい。ダムの件について話を聞いて安心できた。(新宮市)
- ・懇談会の委員に、熊野川町や田辺市本宮の人を入れて欲しい。(熊野川町)

熊野川懇談会 第1回 検討会 議事骨子

開催日時 平成17年8月20日(土) 13:00~16:00
開催場所 和歌山JAビル 第11会場 (別館6階)
出席者: 委員11人 (4名欠席)、河川管理者等3人、傍聴者 なし(非公開)
(資料1 熊野川懇談会委員 参照)

第1回熊野川懇談会 検討会を開催し、補充委員選考経過報告、河川整備計画上の課題および必要なデータ・情報についての意見交換、「熊野川を語る会」について、「ワーキング」について の審議を行った。会議の議事骨子は以下のものである。

1. 補充委員選考経過報告

補充委員選考会で竹中委員の後任として古田皓氏((株)テレビ和歌山取締役報道局長)を選考したことを参加委員に報告し、承認を得た。なお、欠席委員には書面にて承認手続きを行う。

2. 河川整備計画上の課題および必要なデータ・情報についての意見交換

河川整備計画上の課題及び必要なデータ・情報について意見交換を行い、今後検討を進める上で必要と考えられるデータ・情報を河川管理者に提示した。

3. 「熊野川を語る会」について

- ・熊野川を語る会を流域内6箇所で開催し、各委員が分担して参加する。開催地、各委員の分担は以下の通り。

開催地 (予定)	関係市町村	参加委員 (太字は責任者を示す)
北山村	北山村、下北山村、上北山村	木本委員 、橋本委員、吉野委員
猿谷ダム 管理支所	天川村、野迫川村、大塔村	井伊委員 、津田委員、山本委員、 木本委員
十津川村	十津川村	橋本委員 、高須委員、井伊委員
熊野川町	熊野川町、田辺市本宮町、紀和町	瀧野委員 、椎葉委員、山本委員、 木本委員
紀宝町	紀宝町、鷺殿村、御浜町、熊野市	清岡委員 、瀧野委員、間瀬委員
新宮市	新宮市	中島委員 、江頭委員、清岡委員

- ・語る会を開催する前に、懇談会委員(責任者)、河川管理者、庶務が開催地を訪れ、関係行政機関に趣旨を伝え、参加者(発言者)の募集を依頼する。
- ・語る会は10月~11月に実施する。
- ・語る会のテーマ等については、江頭委員長、橋本委員が共同で作成する。
- ・語る会には、河川管理者(国、県、電発等)に参加を依頼する。

4. 「ワーキング」について

- ・情報提供されたデータをまとめる場として今後ワーキングを活用する。

熊野川(天ノ川)を語る会 議事骨子 (五條市大塔町開催)

開催日時 平成17年12月11日(日)13:30~16:00
開催場所 五條市大塔町ふれあい交流館 大ホール
出席者 担当委員 井伊委員(進行役) 木本委員、津田委員
同席委員 江頭委員、清岡委員、瀧野委員、中島委員
意見発表者 泉井弘一氏(五條市)、北村勇氏(五條市)、家田公雄氏(野迫川村)、小倉徳太郎(野迫川村)、
中上栄一氏(野迫川村)、青木健一氏(天川村)、久保彰守氏(天川村)

「熊野川を語る会」を開催し、五條市大塔町、野迫川村、天川村を代表する方々による熊野川(天ノ川)との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようなものである。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(1) 地元代表者による意見発表

- ・ 猿谷ダムのヘドロの堆積の原因として取水口横を流れる谷筋への土砂投棄が上げられる。このことについて何度も管理者へ訴えているのだが、管理境界を理由に対応していただけない状況である。この結果、土砂はダム湖に流入し、取水口を塞ぐようになっている。ヘドロの発生を未然に塞がずヘドロを作っているような状況なので、上級官庁である管理者は、県、市町村等への働きかけを行いダム湖への土砂の流入を防いでほしい。また、ダム湖付近の廃道とダムとの間の法面が土砂の捨て場になっている。これをほっておくとヘドロの原因となるので、管理者として対応してほしい。また、漁協が知らないうちに釣り場が出来てしまっているのも問題である。【泉井氏】
- ・ 上流の住民は、不法投棄をさせないように対策を講じる必要がある。スカイラインから谷を覗くと、テレビや自転車が捨てられている状況である。これらのごみは谷を流れ、いずれ下流まで汚染されることになる、上流の谷でもビニールなどが引っかかっていることがあり、不法投棄には十分注意を払う必要がある。山は林業不況により荒廃してきている。川を守るために森林の間伐や整備の費用を負担してほしい。キャンプの客は多くなってきているが、村への恩恵は少なく、ただ、ごみが増えるばかりである。【家田氏】
- ・ 野迫川村の森林は、人工林が70%を占めている。以前は、1haあたり300~400万円の収益を期待し整備を行ってきたが、現在では1/10に価値が減り、生活意欲、森林整備への意欲、川をきれいにしようという意欲がなくなってきている。上流の住民として、下流への義務として山を作ってきた。これからは、河川自体の整備だけではなく、治山等の流域整備を行うことが重要である。昔の野迫川の谷には、ホタルやキリクチ(イワナ)がいっぱいいたが、高野龍神スカイラインができてほとんどいなくなった。スカイラインの道路排水が谷を伝い水質が汚染されている。夕立等が降ると、車道のゴミ(タイヤ粉塵等)により初めは黒い水が流れることがある。最上流においても川が汚れ生態系が崩れてきた。明治22年の水害、昭和28年の水害、伊勢湾台風、ダムの建設等により、川の状態が変貌し、その都度、村の暮らしが変化している。【中上氏】
- ・ 大塔村は、星と空気と水がきれいであるとしてPRし、観光資源にしてきた。しかし、実際は、ダム湖の水は濁っておりダムの流木も問題である。ここ、1年間の流木が放置されているものもあるので、早急に回収して欲しい。一度ダムに溜まった水は、水温も低く、腐っているのか、鮎は育たない。維持用水としてダムの水は(ダムから直接)流して欲しくない。アユの育成に適した川原樋川の水を直接(ダムに一旦入れないで)下流に流して欲しい。地域振興策として猿谷ダムでバス釣りの営業も考えたが、猿谷ダムは、水位の上下変動が大きく、ボートの上げ下ろしが困難で貸し船の営業が難しい。コイ、フナなどを放流していたが、満水時に卵を産み、水位がすぐに下がるので、卵が死んでしまう。【北村氏】
- ・ 間伐材を谷に捨てると、降雨時にこの間伐材が谷を堰止め、谷を洗掘する。このような間伐材の処理についても注意すべきである。また、林道も、災害で損傷してもそのまま放置している箇所が多い。何とかしてほしい。【小倉氏】

- ・ 天川村は、昔から水に接し、独自の文化を形成してきた。環境庁から名水百選に選ばれる等、水文化のある村である。一時、川が汚れたが、近年、各戸負担して下水道を完備したため川がきれいになった。世界遺産に指定され、年間70～80万人の人が天川村を訪れている。洞川地区までは観光客は増えたが、山への観光客は増えていない。【青木氏】
- ・ 洞川には大正時代にアユ、アマゴ、ニジマス、カワマスを放流したが、戦時中のタンパク源として全てなくなった。昭和35年から再度放流している。昭和40年頃からの塩ビパイプの普及により、家庭排水が(土に浸透することなく)直接川に排水され、川が汚れ、子供たちが川で泳げなくなった。水生昆虫も全滅状態であった。その後、ボランティアで蛍の繁殖に努め、現在では、ホタルを通して地域づくりを行っている。今年、河川工事が行われ、一週間くらい濁水が流れたため、ホタルの幼虫が死んで、近年増えてきていたホタルが激減した。川上村などの吉野川では、河川工事において濁水対策をしているが、天ノ川では無対策なのがおかしい。【久保氏】

(2) 一般傍聴者も含む全体での意見交換

- ・ 今回の語る会開催が本当に住民に知られていたのか、管理者側のアリバイづくりの会になっていないか。熊野川は自然がうまく残っていない。熊野川にしかない整備があるはず。治水、利水、景観のマスタープランを策定すべき。(本田氏)
- ・ 懇談会は、河川管理者と地域住民の話し合いにより河川整備を行うこと重要である。(江頭委員)
- ・ 上流の方々が、熊野川に対し非常に気を使っていることがわかった。(瀧野委員)

以上

十津川（熊野川）を語る会 議事骨子（十津川村開催）

開催日時 平成17年10月22日(土) 13:30~16:00
開催場所 十津川住民ホール(十津川村役場内)
出席者 担当委員 橋本委員(進行役)、井伊委員、高須委員
同席委員 浦木委員、木本委員、清岡委員、瀧野委員、中島委員、古田委員、吉野委員
意見発表者 更谷慈禧氏、野尻忠正氏、小西密晴氏、下野拓也氏、東住雄氏、藤村司朗氏

「十津川（熊野川）を語る会」を開催し、十津川村を代表する方々による十津川との係りや村の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようである。

1. 熊野川懇談会について

- 河川管理者により河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(3) 地元代表者による意見発表

- 十津川村は古くは八咫鳥(やたがらす)[神武の東征]の時代まで遡る歴史を有する。また面積日本一の村であり淡路島、琵琶湖より広く、豊かな自然や温泉、世界遺産がある。一方人口は減少し過疎、高齢化が進行している。コンビニもなく光も少ない村であるが、だからこそ残された今忘れられた日本人の心がある。先人への感謝を持って、危機をチャンスに変えて村づくりを進めて行きたい。ダムにより電気等の恩恵を受けた反面、失ったものは多い。スギやヒノキの植林後、手入れを怠ったことが川を濁らせた一因である。我々は下流に対して源流としての責任がある。ダムがあっても濁りを抑える手立てを立てたい。川を治めるためには山を治める必要がある。その輪をもっと広げて行きたい。【更谷氏】
- 昔はアユを始めとして様々な魚が生息していた。熊野川街道を遊歩道として整備し、歩いて山を越え自然を実感出来ることは、十津川らしさのひとつである。昔は河川がゴミ捨て場であったが、近年ではゴミは捨てられなくなり清掃活動も行われている。村外からも川遊びに来て帰っていただく。その際には川に来ることによって自らの心もきれいになれる、そんな川を大切にしていきたい。【野尻氏】
- ダムにより村民の夢が壊されたのではないかと。ダムがなければもっとアユが遡上したかもしれない。山と川は切っても切れない関係である。毎日、山の手入れを行うことが、川への貢献に繋がると思っている。【小西氏】
- 十津川村は川沿いに発達した村で、アユ釣りや材木切りが盛んであった。明治22年には、山の荒廃が原因で大水害が発生した。江戸時代には銅山が掘られたため、栃や樫の木がなくなり、鉍毒が流出してアユがいなくなった。中学校では、なぜ淵がなくなったかを研究・発表しており、生徒達は十津川の環境の変化に興味を持っている。【下野氏】
- ダムにより電気、道路等の恩恵を受けた反面、失ったものは多い。ダムを造ったからには、最大限活用する必要がある。いつも青く美しいダム湖であるようにしたい。海では砂浜が後退しているが、上流でも溪流が侵食されている。土地状況を勘案すると植林していないため、山の荒廃が進んだ。下流へきれいな水を供給するのは上流の義務であり、いかにして山から土砂を出さないかが重要課題である。砂防堰堤に代わって、サワグルミによる補足効果にも着目して利用を図るべきである。【東氏】
- 砂利浚渫にも限界があり、年間50万m³以上の堆砂量に対して搬出が追いつかない。堆砂により水位が上昇し山腹崩壊等の被害が拡大しており、抜本的な対策が必要である。【藤村氏】

(2) 一般傍聴者も含む全体での意見交換

- ・ ダムの影響で水が冷たく濁って河川環境が悪くなっており、アユが生息出来ない状況である。植林後の手入れを怠ったため、山の保水力が低下して土石流が発生しやすくなり、これらが堆積して瀬も淵もない川となっている。子供達が泳ぐ場所もなくなっている。(傍聴者)
- ・ 上流から下流までのネットワークは重要である。上流で努力していることを下流にも伝えていただきたい。(更谷氏)
- ・ 風屋ダムの水を下流へ流したいが、濁った水となるため下流から反発がある。本宮町辺りの瀬切れ区間を改善して欲しい。観光資源として筏流しを復活したり、子供たちが魚釣り出来る場所を増やして欲しい。(野尻氏)
- ・ 河川敷の仮置き残土が大水の時に流出して問題となっている。(小西氏)
- ・ 村民ぐるみで子供から大人まで取り込んで学習していきたい。全国川サミット等、子供達の発表の場におけるネットワークは広がっている。(下野氏)
- ・ 本宮町辺りの瀬切れ区間を改善して欲しい。(東氏)
- ・ 浚渫した砂利を運搬して海に帰すなどの対策も考えればよい。(藤村氏)
- ・ 人口は毎年60~80人減少している。若者が帰ってきてても働き先がない。林業不振で150社が現在は2社となっている。林業から建設業へと移行しており、70社程度の業者がある。山と川を守るのがこれからの観光であり、心身再生の里を目指す。ガードレール等へ間伐材を積極的に利用する。(更谷氏)
- ・ どの程度造林するかが重要であり、有用なものを育て価値を高めるために間伐や枝打ちを行うことで、環境保全への効果も期待できる。(東氏)

以上

北山川（熊野川）を語る会 議事骨子（下北山村開催）

開催日時 平成17年11月27日(日) 13:30～16:00
開催場所 下北山村スポーツ公園きなりの郷 若者センター 中研修室
出席者 担当委員 木本委員(進行役) 橋本委員、吉野委員
同席委員 江頭委員、清岡委員、瀧野委員、中島委員
意見発表者 葛城健也氏(北山村)、中山敏男氏(北山村)、中谷宏氏(下北山村)、田室敏三氏(下北山村)、
山岡彰夫氏(下北山村)、金山進英氏(上北山村)、平山孝一氏(上北山村)

「熊野川を語る会」を開催し、北山村、下北山村、上北山村を代表する方々による北山川（熊野川）との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようである。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(4) 地元代表者による意見発表

- ・ 都会の人が癒されに来る川である。昔はよく川で泳いだ。アユやアマゴがおりホタルも舞っていた。台風によって砂利が流出して河床が埋まったため、これらを取り除いて元の川に戻して欲しい【葛城氏】
- ・ 子供の頃は水がきれいでした。現在は泥を被ってしまい生態系が大きく変わってきている。観光客にはエメラルドグリーンと表現しているが、実際は台風で水が濁り、なかなか浄化されない。ダムの影響であるが、できたものは仕方がないので、現状をどうしていくかを真剣に考えることが必要である。川にとっては、山の対策も大切であると考えている。【中山氏】
- ・ 昔は四万十川に匹敵する清流だった。筏下り、鮎釣り、うなぎ取りなど生活の一部だった。池原ダムの恩恵を受けて、生活が一変したが、反面、土砂が流れてくるなどの弊害が生じている。水利権の更改をお願いしたい。10年ごとに電発と協議して少しずつでも池郷川の水利権を返してほしい。現在は、池郷川の水量が少なく伏流している。【中谷氏】
- ・ 治水と治山、森と水は切り離せない関係である。かつては、筏流しが木材搬出の重要手段だった。広葉樹がパルプ材としてつぎつぎ伐採され、住宅需要などの影響で山々には杉ばかりが植樹された。杉やヒノキには落葉広葉樹ほどの保水力がない。日差しが林床に届かず低木も育たない。これらが土砂流出の要因となり、川に砂利が堆積した。現在は、保水力低下の対策で緑のダムとして、針葉樹に変わり落葉広葉樹を導入してきている。スギやヒノキの混交林にすることは重要である。川に近接して植えれば浄化効果も期待できる。奈良県では平成18年度から森林環境税を導入した。川の恩恵を享受する下流の町の人々の意識が高まることを期待している。流下する砂利量が減少して七里御浜が減少している。上流域から陸路で補給はできないものか。自治体と国の間での交渉を期待している。【田室氏】
- ・ 熊野川は度重なる台風の影響で昔の面影はない。砂利が堆積して河床が上がっている。林道による山腹の崩壊、木材価格の下落による放置林の増加、緑のダムの機能低下、雨量の増加等が原因であり、堆積した砂利を早急に除去する必要がある。護岸復旧工事は、昔の姿をもっと参考にして行うべきである。広葉樹は望ましいが、針葉樹に比べて高価で育てるのにも時間がかかる。組合としては薦めたいが、所有者の意欲がそこまでいけるだろうか。【山岡氏】
- ・ 子供の頃の大台ヶ原は自然林で保水力があったが、人工林にしたことで鉄砲水が発生するようになった。森林の手入れをしないため、台風が来ると河川が滅茶苦茶になる。魚が釣れないため、今年の釣り客は去年の1/3程度だった。熊野川の水の色は池原ダムの水の色である。電源開発は池原ダムの浄化を考えて頂きたい。【金山氏】
- ・ 大台ヶ原の保水力低下が大きな問題である。山肌が荒れて土壌が削られている。世界遺産の下がこんな状態では何十年後には大変な事になるだろう。ダム湖には遊歩道を設けて緑を回復して欲しい。このように官民交流の機会が増えて提案意見が少しでも取り入れて頂ける事を望む。治山のために植樹してもシカの食害に遭って育たない。【平山氏】

(2) 一般傍聴者も含む全体での意見交換

- ・縦割り行政で問題をどこに提起すれば良いか分かりにくい。(金山氏)
- ・土砂問題を解決すれば濁りは解決すると思うが、土捨て場が無いため需要と供給のバランスが取れていない。七里御浜へ持っていき事を考えて頂きたい。自由に土砂を処分できる法律も考えて頂きたい。(金山氏)
- ・地元要望と国が補助してくれることはかけ離れている。地元が潤う山づくりや林道等の細かな整備を望む。(平山氏)
- ・昔は、砂利が堆積しても次の台風で流されて元に戻っていた。(山岡氏)
- ・上流の尖った砂利を河口まで運ぶと下流住民は問題視するのではないだろうか。(田室氏)
- ・ダムの上層水を流すようにしたので下流はきれいになったが、上流では濁りばかりが残るのではないか。流域全体での対策をしないと濁りは解消できない。(中谷氏)
- ・川が濁っていると危険性が高まる。どうやって親しみやすい川へ戻すかを考える必要がある。(中山氏)
- ・堰堤を取り払えば昔の川に戻るのではないか。反面、山が崩壊する可能性があるため難しい。(葛城氏)
- ・川のアユやアマゴは減り、ダムのブラックバスが貴重な収入源となっている。(金山氏)
- ・住民は山腹崩壊が起きる事がある程度予測できる。災害予防工事はできないものか。業者がサービスで植樹等を行っているが限度がある。(平山氏)
- ・色々な活性化のアイデアがあっても、村費が少ないため実現しにくい。広葉樹林を2割確保するような法律規制や、企業とのタイアップによる植林など、自治体が積極的に動かないといけない。(中谷氏)
- ・森林組合でも世界遺産のガイド養成に取り組んでいくことを考えている。和歌山では企業の森というものを行っており、奈良でも要望を出していきたい。(山岡氏)
- ・山から河口まで、川は切り離せない。流域全体のリーダーを育成する必要がある。(江頭委員長)
- ・下流域はもっと上流域に感謝する必要がある。(清岡委員)
- ・公的な山からでも間伐を進めていく必要がある。落葉広葉樹は成長が早い。(瀧野委員)

以上

熊野川を語る会 議事骨子 (新宮市熊野川町開催)

開催日時 平成18年1月15日(日)13:30~16:00
開催場所 熊野川総合開発センター 大研修室
出席者 担当委員 椎葉委員(進行役)、瀧野委員、木本委員、山本委員
同席委員 清岡委員、高須委員、中島委員、橋本委員、古田委員、吉野委員
意見発表者 北正一氏(新宮市熊野川町)、三枝孝之氏(同左)、中村八十八氏(同左)、
下西幸男氏(田辺市本宮町)、坂本勲生氏(同左)、岡本光弘氏(熊野市紀和町)

「熊野川を語る会」を開催し、新宮市熊野川町、田辺市本宮町、熊野市紀和町を代表する方々による熊野川との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようである。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(1) 地元代表者による意見発表

- ・ 瀨峡の玄関にあたる玉置口に住んでおり、家は5代目、代々筏流しなどの川の仕事をしており、父親までは団平船の仕事をしていた。現在は観光民宿、観光和船等を営んでいる。瀨峡付近は民有林が保安林となっており、自然がそのまま残されている。最近の水の濁りがひどく、1年くらい濁りが取れないことがある。昔は川底が見えたが今では1m程度の深さまでしか見えない。水の濁りの改善を望んでいる。また最近、ブルーギル等の外来魚やカワウが多く見られる。アユなどの生態への影響が心配である。ずっと舟に乗ってきているので、川が命であり、川の恩恵を十分受けているが、台風時には対応で2~3日間ほど徹夜が続く。平成16年には4回ほど家が浸かった。特にダムが出来て被害が多い。ダムの放流量が5000トン~6000トンを超えると2階の床上まで浸水する。放流操作の影響で水位が極端に変化するので、ダム放流を階段状に行うのではなく緩やかにしてほしい。台風の時には進路が事前にわかるので予備放流をもう少し早くしてほしい。また、放流の指令を名古屋でやっているそうなので局地的な大雨に対応できるか不安である。川の話ではないが、道路が狭く不便なので待避所の整備を進めてほしい。【北氏】
- ・ 熊野川町の西敷屋で農業をしつつ、廃校を活動の拠点にして、若年層を対象とした体験学習活動を実施している。懇談会の委員には学識経験者が多いが、住民の生活にいかに関わりつけるか、住民の視点で川をどうするか考えてほしい。また地域の人々の想いが届くよう地域の人を会に入れた体制を作してほしい。10分程度の話で住民の意見を聞いたと言われても納得できない。川を人間の体でたとえると血液にあたる。丈夫な体は丈夫な血管ときれいな血が必要であるが、今の熊野川は不健康な状態。ダムで水が濁り山地は崩壊している。これが世界遺産にふさわしい川か疑問である。ダムを取り壊すことを前提に検討を進めてほしい。川を良くする事は山をよくすること。畑を良くする事。川を切り口に地域の人々が住みやすい環境をいかに作るかがこれからの課題である。一住民として出来ることは汗を流しながらでも取組んで行きたい。【三枝氏】
- ・ 熊野川町日足で27年住んでいる。越してきて1年後に初めて洪水の被害にあった。それ以降何度も被害にあっており、平成16年には2度も浸水した。十津川と北山川が合流しそこに赤木川がぶつかるため日足地区では水位が上がりやすい。引越せばよいのだがこの景観がすばらしく住み続けている。日足ではここ何年か「スズキ追い漁」を行っている。日足辺りまで1m位のスズキが上ってきており、かろうじて昔の自然が残されている。現在日足には道路計画があるが、その橋脚等で流れが変わり水害が増えるのではと懸念している。昔は川沿いに穴を掘ってゴミを燃やしていたが、今は焼却炉が出来たので川を汚すことが少なくなり、川沿いには桜を植えている。これからもここに住み続けて行きたいので、住民に優しい、住民意見を反映した道路整備、河川整備を望みたい。【中村氏】
- ・ 山、川、海は全てつながっており、全てが大事である。最近は獣害が多いのでイノシシやシカを取ることに熱中している。また日本ミツバチを飼育したり、夜は谷を回りウナギ採りをしたりと、自然が好きでいつも自然の中で過ごしている。世界遺産登録前に選挙が続いたが、誰も熊野古道に熊野川を含めた話をしなかった。その当時熊野川は「住民熱意の低さ」や「川」の世界遺産登録の事例が無いという二点で登録されていなかった。熊野川を世界遺産に登録しようということで新聞などに投稿し、幸い新聞でもとりあげられ、熊野川が追加登録に至った。さらに、熊野川の水を何とか増やそうと、町会議員に立候補し、当選後町に働きかけて現在の維持流量として2.4m³/s流してもらえるようにした。さらに、世界遺産の川として2.4m³はあまりにも少ないので、現在、せめて水量を倍にしようと署名活動を行っている。この「語る会」についてはただ開催するだけでなく、何か結果を残していただきたいと思う。台風時には、ダムの操作で降雨後すぐには放流がなく、後で一気に放流される。予備放水を行うなどのシステムがあれば水害の発生がまったく違ったものになるのではと思う。【下西氏】

- ・熊野川はこれまで川の道として多くの恩恵を地域にもたらした。江戸時代においては、お付の者と合わせて総勢90名程度の巡検衆が34艘の川舟を利用したという記録がある。その際には川の整備とともに道路整備も行われるなど様々な人足動員が必要であった。また、文政年間にあるゆぎょう上人が来た際には、舟、カゴが準備され休憩所も設けられた。また、聖護院の宮が来られた際にはお付の者が1000人来たため、食事等の準備が大変であった。天保8年に巡検衆が来た時にはこの準備で舟70艘人足600人の人足が必要となった。また熊野川は昭和30年頃までこの地域の重要な交通路であり、山で取れたものを新宮へ運び、帰りには醤油や酒などが運ばれた。

また、洪水の歴史については、嘉永元年、明治22年(十津川大水害)、昭和8年(萩の大洪水)、昭和28年(1.18水害)等の被害が記録されている。昭和37年からはダムが完成したため、本宮町の熊野川には水がない状況となっている。今の熊野川は死んでいる。元の川に戻すためには、ダムの放水の確保が重要。ゆくゆくは本宮大社の旧社地から、川下りの復活を図りたい。環境整備にあたっては、いろいろなことを地域住民から聞きながら進めて欲しい。【坂本氏】

- ・紀和町小舟は十津川水系と北山川水系の合流点にある。川には昔から愛着を持っているが、アユが小さくなるなど、ダムのせいで川は変わったという印象を持っている。このあたりでは昔は川原で稲を干したり稲こきをしたりするという文化があった。近年では河床が徐々に低下しており、平成16年の台風では護岸が削れ大変な被害が出た。このあたりは、十津川が増水すると北山川の水が堰き止められ水が溜まり、後でゴミの処理が大変となる。一方で北山川が増水すると急流になって梅の木などが流出してしまう。何とかダムの水を早めに出すなどして水害低減のため調整できないのだろうか。ダムが無ければこのような状況にならなかったのではと思っている。ダムと住民の調和が重要であり、現在、漁協で流域住民の署名を集め、要望書を流域3県の知事に提出している。「ダム放水 止まりて細き アユの川」【岡本氏】

(2) 意見交換

- ・外来魚が増えていると聞いたが、どのあたりで増えているのか教えてほしい。(瀧野委員)
 - 外来魚が増えている場所は瀨峡の周辺、玉置口のあたり。アミを投げるとブルーギルやブラックバス、アユカケに似た魚がよくかかる。(北氏)
 - ブラックバスなどは池原ダム、七色ダムから下へ流れて来ている。熊野川は流れが速いので繁殖は行われていない。上流を含め魚類の生息状況を再度把握する必要がある。アユカケに似た魚はギギである。(瀧野委員)
- ・ダムが出来ると河床が低下するのが一般的であるが、本宮町で河床が上がっているのは何故か。(木本氏)
 - 支川からの土砂流入が一因ではないか。必要に応じて河床掘削が必要では。(下西氏)
 - ダムの放水がカギ状に流量が変わるので堆積が起こるのではないか。今は自然な流れではない。(中村氏)
- ・江戸時代には、日足に関所があり、川舟1艘100文の通行税を取り、これで暴れ川である熊野川の整備をまかした。また本宮大社の下流には巴が淵と呼ばれる大きな淵があったと記録に残されている。(山本委員)
- ・熊野川では川の濁りが問題となっているが、支川の濁りの状況はどうか。(高須委員)
 - 本宮あたりの熊野川では、ダム放水により濁りが続く。濁りがとれるまで2週間程かかる。支川は道路整備直後に川は濁るが、普段は清流である。(坂本氏)
 - 瀨峡ではダムの放流口に近いので放流時にはすぐに泥水が流れる。下流に行くと澄んでくる。また水温変化も大きく、アユの成育が悪いうえ味もまずい。筏流しで増水すると水温が下がりアユも釣れなくなる。(北氏)
- ・熊野川流域では過疎か、少子高齢化が進んでおり、地域を維持できるのか。また今の子供たちは、熊野川に愛着を持っているのか。(橋本委員)
 - 御輿川での水遊びの際に地元の子供は平気で水を飲む。熊野川はドロが堆積して汚れている。二津野ダムは出来て50年、かなり土砂の堆積が進んでいる。発電しても泥水しか出てこないなら、発電をやめてほしい。(下西氏)
 - 地区では高齢化が進み機能麻痺の状況。すでに高齢社会ではなく、老人社会となっている。川の仕事、山の仕事が無く、これ以上さびれていくようで寂しい。(北氏)
 - この付近ではダムの放流があると1ヶ月は濁りがとれない。支流では川で遊ぶが、本川では子供たちは泳げずプールを使っている。現在は、子供たちが川での原体験を経験できるよう様々な活動に取組んでいる。(坂本氏)

(3) 一般傍聴者の意見聴取

- ・熊野川には関心が高い。川沿いの廃田を活用して洪水と戦いながらナシ園等を経営している。昭和28年の洪水で土砂が流れて熊野川が埋まってしまった。その前の川はもっと表情のある川であった。熊野川のあるべき姿について議論してほしい。河床を下げて洪水を防げばもっと人が住めるようになるのではないか。(カシヤマ氏)
 - ・古道案内で熊野川を見せると皆すばらしいといってもらえるので、出来るだけ熊野川のよさをアピールしている。昔テレビの撮影で来たプロデューサーに「熊野川で誇るべきは川原にある。日本でも有数の川原である。」といわれたことがある。そういわれて見ればこの川原はすばらしい。ただ残念なのは水量が少ないことである。(サコ氏)
- 以上

熊野川を語る会 議事骨子 (新宮市開催)

開催日時 平成18年1月14日(土) 14:00~16:30
開催場所 新宮地域職業訓練センター 大教室
出席者 担当委員 中島委員(代表) 江頭委員(進行役) 清岡委員
同席委員 浦木委員、椎葉委員、高須委員、瀧野委員、津田委員、橋本委員、古田委員、
山本委員、吉野委員
意見発表者 赤嶋恵子氏、楠本弘児氏、角孝志氏、田中旬子氏、尾屋勲氏(以上新宮市)

「熊野川を語る会」を開催し、新宮市(熊野川町を除く)を代表する方々による熊野川との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(1) 地元代表者による意見発表

- ・ 平成16年に熊野川は唯一の川の参詣道として世界遺産に登録された。熊野川の良さを知ってもらうため、新宮市等の支援により、昨年9月より熊野川町の道の駅から新宮の速玉大社前の川原までの区間で川舟下りが実施されている。川舟下りでは熊野川のすばらしい景観、歴史、自然環境を体験できたと多くの人々から喜んでいただいている。一方で、河道の変化が著しく船頭には高い操船技術が必要である。12月から3月までは運休だが、すでに多くの予約が入っている。川舟下りから見た熊野川の現状に対する問題点としては、水量不足、洪水後の川岸のゴミ、川岸の道路の白いガードレール等が挙げられる。今後の課題としては、川舟下りを様々な観光に結びつけること等がある。川舟下りに関連して権現川原の川原屋や新宮城の復元等も考えられる。今後も熊野川の良さをPRしていきたい。【赤嶋氏】
- ・ 写真家として1年の内約200日は熊野周辺の山々に入っており、その際に感じた山地の危機的な状況について話したい。現在熊野の山においては、山が荒れ、山腹崩壊で土石流が発生し、土砂や流木が熊野川へ入っている。このため、大雨発生後、熊野川は濁流が長期化し、ひどい時には2週間余り濁流が継続する。熊野の山の約70%が植林であり、その大部分を占める民有地の手入れがなされていない。このため、熊野古道の沿線においても、大部分の区間が暗く荒れた状況になっている。このような場所では下草が生えていないため根がむき出しになった箇所が多く、土砂流出や保水力の低下の原因になっている。これらの状況は戦後の植林政策のためスギ、ヒノキが密植され、その後の外材輸入により山村が疲弊し、その結果として山の手入れがなされなくなったためである。ガス、水道等の普及により、これまで依存してきた「後ろの山」を放置するようになった結果として、山が荒れ、獣害、花粉症が増加し、山村の暮らしが難しくなり、最後には山村の生活・文化の崩壊に繋がってゆくのではないかと。今後の課題としては「森の再生」が重要であり、下草が繁茂し山肌が見えない状況の森「複層林」を再生することが急務である。【楠本氏】
- ・ 新宮市では、明治22年の大水害、昭和34年の伊勢湾台風、昭和57年の台風10号など、過去に多くの洪水被害を受けてきた。特に昭和57年の台風10号においては、熊野川からの逆流により市内1000戸以上で浸水するなどの被害が発生し、これを契機として市田川河口に水門および排水機場が整備されている。熊野川は全国の1級水系109水系の内26番目の流域面積であるが、流域は多雨地域で急峻な地形を呈しており、計画高水流量が最大で「日本一の暴れ川」と言える。熊野川の計画高水流量は伊勢湾台風時の実績流量を基準に定められたと聞いているが、それ以降も度々洪水が発生し、平成9年の洪水では、ほぼ計画高水流量の洪水が流れるなど、計画高水流量をいつ超えてもおかしくない状況にある。また近年は、流域の山林の荒廃が進んだ状況にあり、安全側にたった計画流量を定めていただきたい。【角氏】
- ・ 新宮市でEM菌(有用微生物群)が持つ浄化作用を活用して、市田川の浄化を進めている。近年熊野川から市田川に浄化用水が導水されているが、生活雑排水は相変わらず全て市田川に流れ込んでおり、汚染が進んだ状況にある。このような川に対して2000年の1月から2005年1月まで毎月1トンのEM菌の投入を継続した。一時は市田川にホタルやカワセミが見られるまでになったが、会として継続するのが困難になり、昨年1月からは規模を縮小し毎月0.2m³程度の投入を行っている。このため水質はもとの汚い川に戻りつつあるようである。新宮市においては、財政的にも下水道整備は困難であり、市田川を浄化するためにはEM菌の投入が最適なのではないか。毎月3~4m³のEM菌を投入できればかなりの効果が発揮できると思われる。また別な話になるが、熊野川沿いの国道168号のコンクリート壁について、熊野に自生する植物を活用した植栽を行い、景観を良くしてもらいたい。【田中氏】

- ・20年前にUターンで新宮市に戻り、農業をやりながら木工を始めた。今は間伐材を利用した学習機の製作等を行っている。さらに3年前からはネイチャースクールを開設し、田植え等の農業体験、間伐等の林業体験の他、沢登り、カヌーの体験を行っている。昨年は、県の支援を得て、農家民泊施設として新宮市の高田の山中にキャンプ用のデッキを整備した。間伐については、山登りで、真暗でクサも生えていない山林を見せると、お客の皆さんも山がおかしいと感じる人が多く、何とかしようということで体験を行うようになった。またこの夏からは熊野川をゴム製のカヌーで下るカヌー体験も始めた。特にカヌーはエンジン付きのボートとは異なり音が小さく鳥などを身近に観察できるので、皆さん感激して帰っていただいている。ただ、熊野川においては、発電所からドロ水が流れており、遠くから来ていただいてもドロ川ではなさない。ぜひ何とかしていただきたい。【尾屋氏】

(2) 意見交換

- ・密植した森林ではダメなのか。どうすれば下草の生えた森が維持できるのか。(椎葉委員)
密植した森林がダメなのではなく、そのまま放置されたのが問題である。(楠本氏)
戦後から始まった効率面重視のスギなどの単一種の植栽には問題がある。戦前は多様な樹種が山林を形成しており、材木だけでなく多様な林産物を産み出していた。自然に近づければ手入れしなくてもよい森が育つ。ゆっくりではあるが多様な山作りを心がけている。多面的な取り組みができるような山づくりが必要である。(浦木委員)
- ・今後の河川環境を維持するための活動は民間レベルでは続けられないのか。(吉野委員)
可能であると考えられるが、PR、勧誘不足等のため続けられなかった。ただし、浄化事業については、市が下水道を作らずに民間に任ずるのは間違い。年間500万円くらいで出来るので市が導入するべきである。(田中氏)
- ・川船下り、体験事業等について今後の観光面での展開や条件整備についてはどうか。また、流域の環境整備をどのように考えればよいか。(橋本委員)
川舟下りは補助金支援を得て行っているが今のところ赤字である。問題点としては交通アクセスが悪いこと、山の法面、ガードレールの色が熊野川の景観を損ねており残念である。(赤嶋氏)
農林業体験については、他でもやっており熊野まで来てする必要はない。熊野古道ウォークと川舟下りなど、複数のメニューを組み合わせることが望ましい。また、営業に出るのが難しいので、行政や大学の支援があればありがたい。(尾屋氏)
- ・治水対策や森の問題などについては、我々と河川管理者の宿題としてきちんとしたデータに基づいて議論したい。(江頭委員長)
- ・地域に生息している樹木を用いたコンクリート護岸の景観改善策を、現在地和歌山県が検討している。(瀧野委員)
- ・市田川の水質改善にはどのようなものが必要なのか。(椎葉委員)
浄化には毎月3~4m³のEM菌が必要となり、人件費も合わせると年間500万円くらいが必要である。(田中氏)
- ・新宮市が上流地域と一緒に熊野川のために一緒に事業を行う等の動きはないのか。(吉野委員)
行政と連携し、補助事業を活用しながら、山林の再生を進めることは可能ではないか。(楠本氏)
行政の組織として熊野川流域対策連合会、水質協といった組織があり、様々な活動が行われている。(角氏)
- ・市民レベルでの流域連携の可能性はあるのか、また具体的な動きはあるのか。(橋本委員)
「山は海の恋人」というが、熊野川においては、山側と海側の連携はほとんどない。(角氏)
間伐等の作業は非常に危険を伴うためボランティアが取り組む場合には、安全面に注意する必要がある。(楠本氏)
- ・熊野川の河川整備では、地域振興の取り組みを盛り込む必要があるのでは。(江頭委員長)
- ・「世界遺産の川」は熊野川の良いPRになる。できるだけ川下り事業を発展させる必要がある。(山本委員)
- ・森林再生、山の適正な管理のためには、長い目でみれば問題ではあるが、助成を含めた陳情も有効である。生き物は愛情を持って育てるとうまく育つ。工業的な手法から生き物を大切にす手法へと近づくことは、熊野の自然については熊野の神様へ近づくことになる。また、熊野川の和歌山県側の景観については、ボランティア等を使って植林してはどうか。出来るだけ熊野の自然の姿に近づける様な配慮が必要である。(浦木委員)

(3) 一般傍聴者の意見聴取

- ・川の理念に関する意見が無く残念である。昭和30年代には「吉野熊野構想」が持ち上がり、新宮市民も期待したが、結局ダムを作っただけだった。新宮の市民には河川整備に対する不信がある。他の地域から来てもらうためにどうするかというのではなく、地元が育んできた文明・文化をどう再生し活用するかが重要である。猿谷ダムから紀の川へ水を取られ、洪水時のみ熊野川に流されている。今の熊野川は発電のための用水路となってしまっている。自然に近い河川整備を進めていただきたい。今の熊野川は、川で泳げない川、小さなアユしかいない川、川漁師のいない川になっている。
- ・懇談会での討議対象範囲や今後の河川整備事業の進捗予定、計画に関する県との整合性について教えて欲しい。
- ・川の濁水の色は熊野川本流の上下流や支流でも異なり、白色や茶色など様々であるが、色で判断すれば最下流部の新宮が一番豊かな自然の色になっている。新宮市にもすばらしい自然が残されている。これを永く残して行きたい。
- ・市田川が少しでもきれいになるようにとEM菌を活用している。熊野川の最下流部である新宮では、生活面や産業面での川の利用が無い。今後、川下りと市内観光を結びつけるなど、熊野川を利用して繁栄していく方法を考えていきたい。

以上

熊野川を語る会 議事骨子 (紀宝町開催)

開催日時 平成17年11月26日(土)14:00~16:30
開催場所 紀宝町保健センター 活性化ホール
出席者 担当委員 清岡委員(司会) 瀧野委員(進行役) 間瀬委員
同席委員 江頭委員長、椎葉委員、中島委員、吉野委員
意見発表者 谷上嘉一氏(紀宝町)、荘司健氏(紀宝町)、高橋徹夫氏(鵜殿村)、花尻薫氏(熊野市)

「熊野川を語る会」を開催し、熊野市、鵜殿村、紀宝町を代表する方々による熊野川、七里御浜との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようなものである。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(5) 地元代表者による意見発表

- ・ 自然との共生は重要で、人間の営利目的に合わせて自然の摂理を無視してはいけない。人、動物、植物はそれぞれ棲み分けがあり、一度この関係を侵すと復元は難しい。ダム放水による日常的な水位変動がアユの産卵にも影響している。河原がやせ、伏流水が減ることが浄化能力の低下、水質汚濁に繋がっている。魚の数が減り、外来魚の割合が増えた。砂利採取による下流への砂利の供給低下も水質汚濁の一因である。海水が遡上し、海の生物が川へ上ってきている。広葉樹が減少して保水力が低下している。道路建設で交通の便がよくなる反面、山を切って景観が悪化し、ゴミの投棄が増加した。【谷上氏】
- ・ 熊野川の水はエメラルドグリーンで綺麗と言われるが、昔と比べものにならないくらい濁っている。濁水はダムの影響なので管理者は努力して頂きたい。水質悪化には山林の状態が影響しているが、林業も衰退して余裕がない。十津川大水害当時は河床が低く、伊勢湾台風当時は河床が高かった。土砂収支のバランスが崩れて河床が下がったことは、治水的には喜ばしいことであり、砂州の砂利採取も検討すべきである。現在の流下ゴミは、ブルーシートや発泡スチロールが多い。ゴミを流さないために、行政による活動だけでなく、観光客を含め地域住民による働きかけが必要である。【荘司氏】
- ・ 世界遺産を活かした地域活性化に取り組んでいる。単なる川下りではなく、エコツーリズムを基本に熊野川の魅力を丸ごと体感できる活動をしている。現在の自然・文化・景観を壊すことなく、川の古道である熊野川の資源を後世に残すことが大切である。川舟による川下りや、古道を歩くことで、こころの癒しを感じることができる。安全面から水上交通の規制についても考える必要がある。若い世代には、熊野川の文化・歴史に関心を持って貰い、後継者として地域に残って貰うことが必要である。【高橋氏】
- ・ 自然が好きで植物を専門としている。ドロシモツケをはじめ熊野川の固有種は、ダムからの濁水により悪影響を受けている。ウォータージェットが通りやすいように河床を掘りすぎたため、水位が下がり水際の植物が枯れた。三重県側は砂利採取を自粛しているが、和歌山県側はまだ許可されている。このままでは、七里御浜はたった30年で失われてしまうとなる。砂浜では表層部の砂利層が無くなったため、アカウミガメが産卵できなくなった。熊野川の自然を取り戻すために、地域がもっと努力しなければならない。【花尻氏】

(2) 一般傍聴者も含む全体での意見交換

- ・ 活性化を目指す中で、下流においても筏下りを上手く活用する方法はないか。(吉野委員)
トラック便になってすたれてしまった。筏下りや渡し船が昔あったという事は伝えていきたいが、復元までは考えていない。(高橋氏)
- ・ 去年急激に海岸が痩せたと聞いたが、どのような原因が考えられるか。(間瀬委員)
台風が東から来ると侵食が激しい。昨年の台風7号は東からだったので著しく浸食した、砂浜が流出するのではなくやや沖側の海底に砂が堆積している。直角に波が進むのが七里御浜の特徴であり、大きな波で海岸が痩せても小さな波で堆積砂が巻き上がり、元の海岸地形に戻る。(花尻氏)
- ・ 堆積により航路埋没は生じているのか。サンドバイパス工法は考えていないか。(間瀬委員)
サンドバイパス工法は効果があるが、膨大や予算がいる。(花尻氏)

- ・ アカウミガメは、表面の砂利がないため産卵できないのか。(江頭委員長)
表面に砂利が無くなり小砂がほとんどであるため、串本や南部の海岸へ産卵場所を移動している。(花尻氏)
- ・ 熊野川は明治22年の大水害で河床が上がり、その後ダム開発や砂利採取等により河床が下がってきた。治水としては扱いやすい川だが、土砂の取り方には工夫が必要である。(江頭委員長)
- ・ 伏流水はなぜ少なくなったのか。(江頭委員長)
水質汚濁により砂利間に泥が詰まっている。昔は、雨が降って川がよどんでもわんこ(わんど)の中はきれいだったが、今はそんな状況は見られない。(谷上氏)
- ・ 昔は、川が広くて水みちが何筋もあったのか。今は土砂が流下しにくくなったのではないか。(江頭委員長)
反対に土砂の流下を抑えたり、下流の土砂を戻す方法が無いかという話も出ている。(谷上氏)
ヤナギやアシで河原が固定されて動かない。熊野川のかつての河床高を考慮して、どのくらいの高さまで戻すべきか検討する必要がある。(荘司氏)
- ・ 山を育てる事は川を育てる事に直結している。国がバックアップしながら全国的に緑を育てる動きが現れつつある。(谷上氏)
- ・ 三重県では環境創造事業により、保水力の強い広葉樹林を復元する取り組みが行われている。(荘司氏)
- ・ 航路維持のための掘削など、観光化に対する各々の観点での意見はないか。(椎葉委員)
航路維持のため、水が減ると最終的にはバックホウで掘削している。(荘司氏)
本流がどこかを考えながら川づくりを行う必要がある。(谷上氏)
昔に比べて水深が浅くなった。分水しているのも一因であると考えられる。(谷上氏)
自然を維持し、魚がとれる場所を確保したい。川下りだけでなく周辺での楽しみも体感して頂きたい。(高橋氏)
自然の流れに従うべきであり、地域の古老の意見も参考にして川づくりを考えるべきである。(花尻氏)
- ・ NPO等がサクラの植樹を行っている。新宮、本宮間を桜街道にしたい。熊野川を下るとコンクリートが目立つが、これで世界遺産と言えるのか。道の駅に図書館的な要素を取り入れて、熊野川の資料を閲覧できるようにすればよい。(紀宝町 山口氏)
熊野川下流の森林ではなく、人工林をそこまで持ってくる事に不安を感じる。(江頭委員長)
- ・ 保津川では、山陰本線をトロッコに変更したり、国道は観光ルートとして線形改良を行った。現状の道路はトロッコ列車的にして欲しい。(大西氏)
- ・ 河口閉塞が激しく、アユやウナギの遡上が難しいと思う。七里御浜の人工リーフは、追跡調査を行い今後の糧にすべきである。(北山村 松山氏)
- ・ 砂利採取について県毎に見解が異なっている。理想的な川づくりの為にはどのように取り組むべきか。(紀宝町 登立氏)
- ・ 水や砂は連続性が重要である。洪水で流れ、普段は流れないといった自然の摂理のもと、生物が生まれる。許容できる範囲で攪乱をコントロールしながら川づくりができれば最高である。(江頭委員長)
- ・ 熊野川全体では砂利が減少している。(谷上氏) ・ 昔は今より砂利が堆積していた。(荘司氏)

以上